

# アマチャ

牧 幸 男

子供の頃の楽しかった思い出のひとつに、幼稚園で経験した「花祭り」がある。私が通った幼稚園はお寺が経営していたので、5月8日のお釈迦様の誕生日に、背中に「花御堂」を乗せた張り子の白い大きな象を引き回した記憶がある。幼稚園に戻ると花御堂をおろし、皆で水盤の中心に立つ小さなお釈迦様に、竹の柄杓で甘茶をかけた。当時、甘味が少



なかったこともあり、この時口にした甘茶（主成分フィロズルチン）の味をはっきりと覚えている。昭和16年頃のこと、まだ長野県では季節の行事を月遅れで祝うことが当たり前の時代であった。このため、お釈迦様の誕生日は4月8日でなく5月8日に祝っていた。

お花祭りに甘茶をかける行事は、奈良時代に始まったとされ、初め寺院、宮中では種々の香料を用いた香湯を使っていたが、鎌倉時代になって五香水・五色水になり、江戸時代になり甘茶になった。当時は、甘味の少ない時代であったので、この甘味は貴重だったのかもしれない。常盤津の「はやし詞」に「カッポレカッポレ、アマチャでカッポレ」がある。このカッポレは「活惚」とも書くこともあるが、当時の人が甘茶と一体となって踊っている姿を想像すると、何となくほほえましい。

花祭り当日、甘茶を飲めば仏陀の大きな恵みが受けられると言うのが普及の要因である。由来は、お釈迦様に甘茶をかけるのは、お釈迦様がお生まれになった時、八大竜王が歡喜して産湯に甘露の雨を降らせたとの伝説にもとづくといわれている。

アマチャはアジサイ科（これまでユキノシタ科）の落葉低木、日本特産のヤマアジサイの変種とされている。茎の高さは80 cm位で、葉は対生で柄があり楕円形である。7月頃枝先に多数の散房状花序をつけ、周囲には数個の装飾花をつける。花は初め淡紺青色であるが、日を経るに従い紅変する。中には白色に紫斑を交えるものもある。わが国では岐阜県（梶尾）、滋賀県（伊吹山）、兵庫県（宍粟）などに自生している。特に、長野県信濃町の甘茶栽培の歴史は古く、元禄14年（1700）僧閑貞が植えて以来、気候風土が適したのか、盛んに栽培されるようになった。一時、消費が落ち生産が少なくなったが、それでも伝統に守られ調度な栽培が行われている。しかし、現状は国内流通量には十分でなく、インドネシアから甘茶が輸入されている。

甘茶の木は、葉を採取ができまで生育に4年程度かかり、更に木の寿命は15～20年ぐらいである。このため、一旦生産量が減ると従前の生産量になるのは、数年以上かかってしまう。

歌題の対象になるのは、俳句には多く採用されているが、短歌は少ないようである。

と訪ひて来し <sup>ほとけ</sup>み仏の国 スリランカの 人も今日は <sup>そそ</sup>甘茶注がむ 上皇后 美智子 様

蛙にも ちとなめさせよ 甘茶水 小林 一茶

「漢名は土常山を使うこともあるが、正しくなく中国の日本の甘茶以外の別種で、一般に甘茶を用いることが多い」と牧野富太郎博士は述べている。日本名の植物名は、葉を甘茶に利用することによる。学名はHydrangea serrata で、属名はhydr (水) + anageion (容器) で蒴果の形から、種小名は葉の縁に鋸歯がある状態に由来している。

甘茶の製法は種々あるが、信濃町で行われている製法を示すと「葉を8月下旬採取、日干しにする。乾燥後、この葉に適当に水を噴霧し、樽などに積み重ねて一昼夜放置し発酵後、この醗酵した葉を手で揉み日干しにしたものが甘茶」となる。

なお、Hydrangea属 (アジサイ等) は葉に青酸糖体 (はっきりしたことは不明) が含まれているので、中毒例の報告もあり、乾燥や発酵の過程を経てから使うが、大量の飲用は避けるべきである。

薬用は、日本薬局方に収載されているが、専ら矯味剤が主である。最近、糖尿病患者の甘味代用や、胃弱、食欲不振、口臭除去などに使われている。また、体を温めるとも言われ、漁師、海女の方々にお茶として利用されてきた。信濃町で甘茶を最大に消費するところは1927年創設の「宗教法人解脱会」(神仏混淆職が強い) である。

最近、食用方面への利用が盛んになり甘茶そば、甘茶饅頭が売られたり、甘茶を混ぜたお茶も販売されている。その他、甘茶で習字を書けば上達する、灌仏会の日甘茶を飲むと病気をしない、目につけると目が良くなるなどと言われている。甘茶で墨をすり、「千早振る卯月八日は吉日よ、神下げ虫を成敗ぞする」と書き、門口や柱の逆さまに貼って害虫よけのおまじないにするという風習もある。

花言葉は、「祝杯」である。

